

繪本通俗三國志 四編 六

21  
221  
36

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

於  
22  
30

東方學林

王榮

目錄

繪本通俗三國志四編卷之六

曹操大宴鵝雀臺

孔明三氣死周瑜

孔明大哭周瑜

繪本通俗三国志四端卷之六

曹操大宴<sub>ニ</sub>銅雀臺

赤壁の合戦。又曹操が百万の勢を残り少く討まし、又軍  
命を逃まく都へ回り常々人の恨をもたらす。又軍  
勢がほど整ひを。又ハ玄徳孫權が力もありて拒んでおき  
て時を待て居たり。建安十五年の春銅雀臺の造営  
事で、文武の大将で、鄴城より酒宴を設て慶  
とあさて抑おのの基壇とやへ曹操往年袁紹を滅ぼして後銅  
雀の雀と地中より掘出。漳河の邊に高き基壇と立てよままで  
銅雀臺と号。左は玉龍臺と建て右は金鳳臺と立み  
ふ高き十余丈。空中に友橋をうけて往来して通す。

門戸金碧。目輝直欄。横檻。珠玉日映。もとの日曹  
操。七宝の金冠をひき緑錦の袍を著て腰玉帶をうけ。  
足珠履を踏で高臺より上り。まへ文武の大將とぐく臺  
下。侍立と曹操。諸將の弓を試みて赤地の錦の  
袍と。高き押の杖。又けあへ百歩と萬て。一行よ諸將を  
備へ。曹氏の一族へ。まあ紅の袍を着く。外様の諸將へ。ま緑  
の袍を着て。尽く馬よ乗て。雕弓よ長き矢をとりそ入者  
よそあへり。まへ曹操下知と傳く。曰く。もし揚々けたる袍  
の赤毛心當と射たるふらば。金と鳴。一鼓と打て。声  
とあらゆ。まへち。その袍と因心賞とまへ。射損トナリ  
きゆく水とのませて四討とべ。よく射る。まへと射

よ射とあくをざるより。罰盃を飲む言ひよど果ざるも紅の袍を被たら内より。一人弓をとめて馬を生と熟人ともまへばとある。うち曹操が姪。曹休字文烈あり。性來馬をとをせき。走ると三遭すとよく引て丁ぞ謝。その矢直中すあたりル。堂上堂下。ゆ射りくと感じく。金鼓であらと曹操もえひ喜んでままでまづ家の千里の駒あり。ふへりまく。近侍の人楊。みうけたる錦をとめて曹休。みうけん。ムヒちく。忽ち緑の袍を着たら中より。一将馬をもせ牛。あれ。巫相の錦あり。一族の内より。取ゆる。あく。其。わな。くまとよぐり。馬を乘じてまをまつ。諸人まくとよぐり。まあうち荆刀の大将。文聘字仲業あり。矢をひと望せ

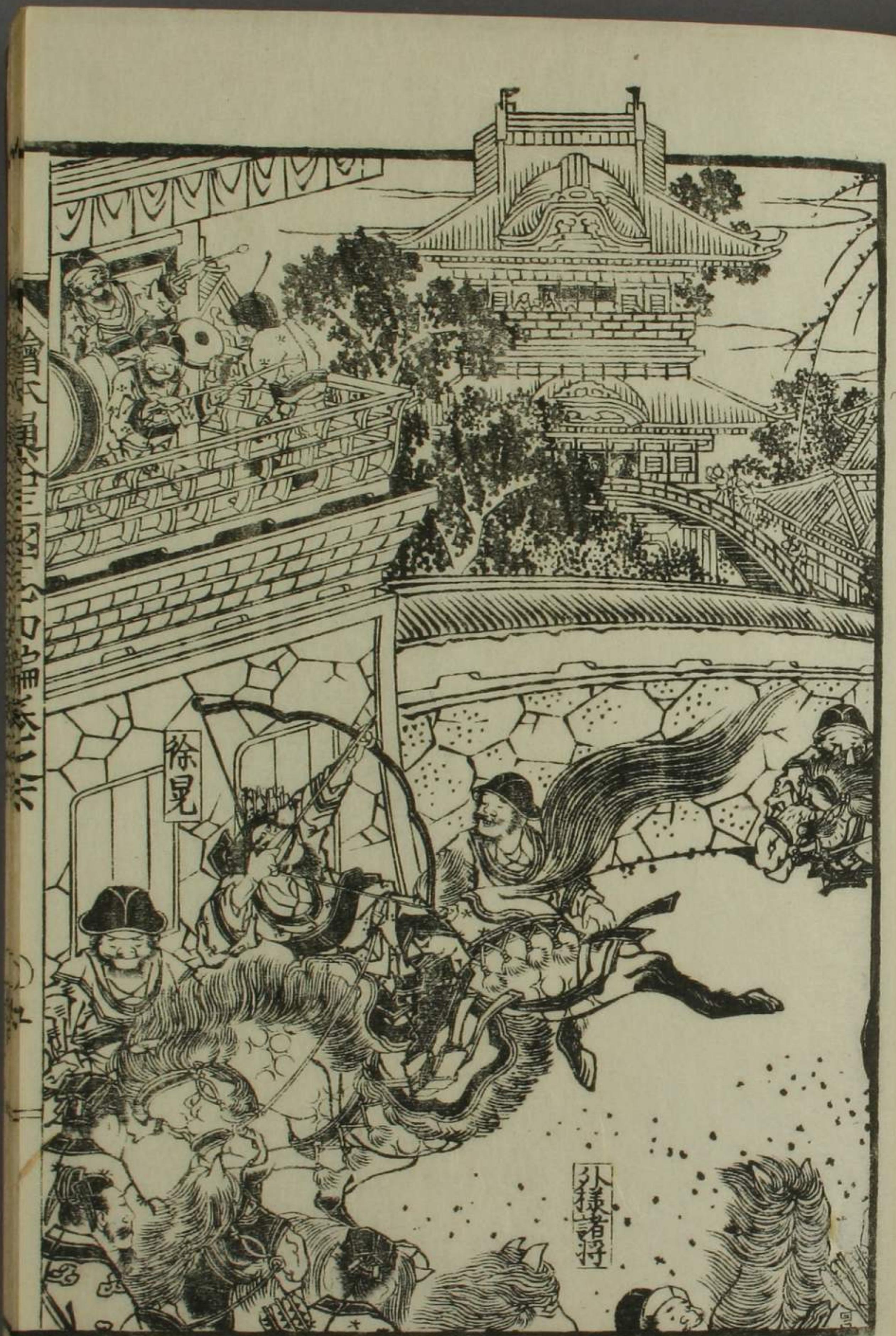
ま。文聘馬をかけまへ兵を射す。矢直中。又中リ。金鼓  
であらそく感称を文聘大音あげ。あらうよく揚さうけたる  
錦をもとより渡り。又とよべり。又紅の袍を着たる内  
より。一人馬を乘じて。うけ出小將軍をもとより射中  
奪へ。ひのゆあふる。そが手糸のねどり。よどり。引  
詰く。へこと射る。諸人声をそろへて感嘆したまぞといへ。引  
曹操が従弟の曹洪あり。走りよりて揚さうけたる錦を  
うちんとされば。又緑の袍を着たる中より。一人の大將馬を  
牛し。汝三人當み射。中たり。のへど。あんぞきの。奇妙  
と。まく足。やまと手柄のねどり。よどり。呼ぶ。諸人ままで  
き。河間の張郃あり。馬をとげて往來。後さまえあひて

射り。弓を。その矢あまご。心當。あたり。四度をかつて一  
川を過ぎ。張郃大音あげ。たまよ。よどり。よどり。  
きのわらん。錦を渡せ。よどる。又紅の袍を着たる中よ  
り。一人馬を坐。御邊後さま。四筋の矢を射中たり。と  
いふ。よどり。よどり。よどり。よどり。夏侯淵。  
馬を乗じて往來。鼓近くあり。と。首を回して後き  
よ。射そ。矢あま。さき。張郃が射たる。四條の矢の  
直中。又立り。馬を坐。大音あげ。ひき。錦の主。よど  
み。よどみ。よどみ。よどみ。諸人感称。と。金鼓をあらそ  
り。又緑の袍を着たる中より。一将をちひて馬を坐。御邊錦  
を取る。あらそ。留てよきよ返せ。とよどる。諸人よきよこれ。

大將徐晃あり。鳴を志びて、居まへ。徐晃大音声。語あ  
げ。汝心當々射中。安んじ。錦を取ん。もふ錦とそ  
る。とくよやといふて。引誂て丁と放り。その矢。遙々揚の枝を  
射切て。錦の袍地。サ落ひ。走りよひて。背み打うけ馬を  
よべて。せ回り。其至上とのぞんで。丞相の賜物を謝へん。と  
る。よびて。アハ。諸人。大々驚く。勿心ち。其臺の下より一人。  
馬とあざらせ。声をあげ。汝錦を取て。何へ。行をやく。とよ  
あこへ。よと呼ぶ。諸人。あきやま。サ。難郡の許褚あり。真  
馬をうけよせて。奪ひ。とまく。徐晃奪ふ。下と逃走り。相  
近。よりハ。弓を。手を。握り。右の手は徐晃を。搦めども。引落さん。

志。徐晃弓を。馬より飛下て。逃ん。よ許褚。も  
続て。馬より下二人。引細人で。錦を。引合さん。と。打擣を。曹  
操臺の上より。まことに。入。坐。と。両方へ。引のけ。ゆうと  
た。の錦。と。微塵。あり。けり。曹操二人。臺上。よが。を  
り。又徐晃。目を。ひら。一拳を。握り。許褚の牙を。咬眉を。逆。と  
も。あらそひ。氣色。よろ。け。曹操大笑。ひ。今  
日。汝。お。才藝。と。あ。ろ。み。ん。と。わ。い。を。あ。ひ。と。錦の袍を。惜まん。や  
う。と。文武の大将。と。尽く。臺上。よ。裕。き。蜀江の錦。一匹づ  
き。もの。な。位階。よ。列坐。水陸の珍味。よ。ら。裕。音樂  
天。よ。ひ。き。酒宴數刻。よ。ば。ル。ま。曹操。や。る。と。武將。已。よ  
弓馬。と。も。能。あら。す。文官。の。ま。ど。も。ひ。あ。博學。の。名。

曹操  
諸侯  
小臺  
銅雀  
武術  
と覧



ト。土あまの墓上より。あへぞ准<sup>クサ</sup>章と賦<sup>ス</sup>。一時の勝<sup>ト</sup>事<sup>ト</sup>を記せむ。うるといひもくの文官<sup>ト</sup>坐<sup>ト</sup>り。起<sup>ト</sup>てあまと謝<sup>ム</sup>。絶<sup>ト</sup>ぐるを釣<sup>ム</sup>。余よ志<sup>ト</sup>ながへんとゆそく。なげぬ相<sup>レ</sup>譲<sup>ム</sup>。一人をもきも生<sup>ト</sup>て曰く。某不才よりども。絶<sup>ト</sup>ぐる<sup>ト</sup>銅雀<sup>ト</sup>墓<sup>ト</sup>の詩<sup>ト</sup>を献<sup>ム</sup>。曹操<sup>ト</sup>もあへち<sup>ト</sup>諫<sup>ム</sup>議<sup>ト</sup>大<sup>ト</sup>夫<sup>ト</sup>參<sup>ム</sup>司<sup>ト</sup>空<sup>ト</sup>軍<sup>ト</sup>事<sup>ト</sup>東<sup>ト</sup>海<sup>ト</sup>鄧<sup>ト</sup>人<sup>ト</sup>。王朗<sup>ト</sup>字<sup>ト</sup>景興<sup>ト</sup>あり。雲箋<sup>ト</sup>拂<sup>ト</sup>て七言<sup>ト</sup>を綴<sup>ル</sup>。

銅雀臺高壯帝樂  
三千劍佩趨黃道  
百萬貔貅現紫霄  
雲生碧瓦平龍丞  
君臣慶會休辭醉  
推乃樽天香滿袖  
水明山秀競光輝  
百萬貔貅現紫霄  
雲生碧瓦平龍丞  
君臣慶會休辭醉  
推乃樽天香滿袖

賞さうみあたへり。王朗りょう拜はい謝せりと退しりぞくく。又一人またひと生うて曰いく。老お臣じんも称ほづく。里語りよと獻さけんらん。曹操そうそうとどき。東武亭侯とうぶていこう侍中尚書左僕射しちゆうじょうしょさくふしゃ。顓わい刀とう長社ながのの人ひと。鍾繇ちゆうりゅう字ひらめ元常げんじょう。よく隸れい書しょの妙めうを得とたる。さあいち七言しちげん八句はくくを書かく。

銅雀臺基宮閣接上天  
欄干屈山留明月  
窓戶玲瓏壓紫烟  
漢祖歌風空擊筑  
主人盛德齊堯舜  
定王戲馬漫加鞭  
願舉昇平万万年  
曹操志士而喜之御邊の佳作。とて過譽を  
るとある。とてさく思賞をふとへ又謀大將はる。我

もとより愚庸ぐよう才浅さへあさ才淺さへあさけとべ始はじら孝廉こうりん也譽よげらば。微名びやくめいと世よも立たつるときのぞむれへ望足のぞむれりとのぞむれて後のちへ天下おほやの大乱だらんもあつて病やまを養やま人ひと為ためは故里ふるさとへ回まわり。熊東くまひがしの五十里ごじりも精舍せいしゃと築つき。夏なつ秋あきへ書かと読よ春はる冬ふゆへ猶うやまであ。二十年じゅうねんの計けいとあして身みの難なを逃のがれ天下おほやの治じを待まて又仕官しがんせんとと。卒そつふ甘あまが意いを任ませど朝延あさひのの召めして点軍校尉てんぐんこういとあ。まのやへよからぬら國家こなの爲ためと逆賊ぎやくざと誅つト功名こうめいを世よ傳つく。死死と後のちふも墓はかを封むすとく。漢かんの故征西こくしゆ將軍じょうぐん曹侯さうこうの墓はかとよぶま。先祖せんそとも辱はず。平生へいぜいの願ねがひあ。であらんとと。又董卓とうたくが難なんをあめて義兵ぎへいをあげ黄巾こうきんの乱らんと平ひらげて。一方余級よきの首くびを取と後のち袁術えんじゆと討うて。その四人の大將だいじょうを擒つかふ。袁紹えんじょと破はて。その三人の子こを誅つ。劉表りゅうひょうを定さだて荆き州しゆを推す

位くわいとと幸とよ相あ登のるりいれべ。人臣ひとしんの富貴ふき身みも極きわり。意あいの想おもすととよ過すぎなり。天下おほやももあくあくへん。國くに々々謀反ぼうはんとと。帝王おうじやうとと称めいす。ももの。あくあく數すうるよいととあらへへや。あくあくへへや。ももが權重けんぢゆうく。位くわい高たかきととて。天下おほやとと篡さんののありとと。まき大乱だらんの道みち。齊さいの桓公かんこう晋けいの文公ぶんこうよく後代こうだいと名なを傳つる。すのへととの身勢しんせいひ丈たけ。ととて。周室しゆしつも事ことる。あり孔子こじんの曰いく。周文王三分天下さん。有あ其ご二に以い服ふく事じ殷えん周くわい。之の德とく其その可こ謂い至德しどく也や而矣で。そとと大だいああくくととわわて。日樂毅にゆき趙あわせ。趙あわせ王おう兵ひと起おき。とともも熱ねつて伐う。とともも樂毅にゆきが傳つて讀よ。昔きき地ぢとと拜まつ伏ふ。疾めまいあふふて曰いく。臣しん昔きき日燕えん王おうも事ことる。あと大だい王おうよ事ことる。がゆゆし。ひろ死しとも不義ふぎのととを為なす。ととり。又蒙もん恬恬。

傳て読み。胡夷。昔日蒙恬と殺さんとも。蒙恬が曰く。父祖  
とよば。子孫まで至るまで。徳を奉り積む三世あり。まことに手下の  
精兵三千方をもれぬなり。おまことして謀反せ。胡夷。まことに  
うんどうあきらめ。思ふれども。あらすじ死にて。義で全なるものお  
あへて父祖の教を辱しやせ。又先君の恩を忘まざるありと  
り。おまことの二人の書を読んで感嘆して涙する。おまことといふの  
あし。おまこと安ぞ篡逆の心あらん。今日の言へこあまこと肝膽を  
吐の誠あり。右裕念ふるよ詔の仔細。むろ周公。金縢の書を  
遺して。おまこと明ら。人の信せざらんことを怕ふ。おまことのま  
にむかふの女をもととく。おまかせをもととく。武平侯の國を回ら  
て緑ぐども。もろ手下の兵をもととく。人を害せらまへて怕るお

ふ。又子孫の為て計り。方一人を害せらまへ。漢の天下も隨く  
滅びある。おもへよ已とて得をもとく。兵を司る汝水文武の諸  
將をあらざるが故である。まどとおひきまへ。諸将をあ拜休。  
伊尹周公といふも丞相の徳とよびひつとぞや。曹操又  
投盃てうなづけ。おもへぞ大に醉ひまへ。左右を命じて。華覗を  
とりよせ。おもへも。おもへ。銅雀臺の賦を作らんとて雲箋をあ  
うきのべ。吾獨一歩於高臺今。俯觀万里之山河。とひ。三句を  
書ひ。おもへ。易坐ち入。吳の孫權。家華敵といひ。おもへて使。天  
子。おもへ表を上。玄德。荆。劉の太守。妹孫夫人。おもへて妻せ。  
荆。劉。九郡。大半まで。玄德。おもへ。屬せりて告。劉。曹操。平足を  
もひて大に駭き。おもへ。華敵を落したり。程昱が曰く。丞相敵

軍の中へありて矢を中り。石を打たれてまよひて動く。  
かくのほどには玄徳が荆歎を得たるときもあつて。あつてはうるどままで  
驚き。曹操が曰く。玄徳は人中の龍あり。平生をまざ水を  
得た。いま荆歎を得て。龍の大海上へ入らば。まことにあんぐで驚  
ぎ。うん程昱曰く。はま華歆が来りたる本意を志りゆく。曹操  
が曰く。あらき。程昱が曰く。吳の孫權もとより玄徳を憎む。もとより  
て起きて。あまと攻め。丞相の虚名のにて討ひへんことを怕る。孫權  
の華歆を使とて。玄徳が太守を封せんと奏さるやうの。一川  
みへ玄徳がんや安んじて。二川みへ丞相の望を塞ん為。あらう。曹操が  
曰く。あらとまことある。計を用げ。程昱が曰く。某一川の計す。  
玄徳と孫權とよ合戦させて。味方中より攻るとなへ。二人と

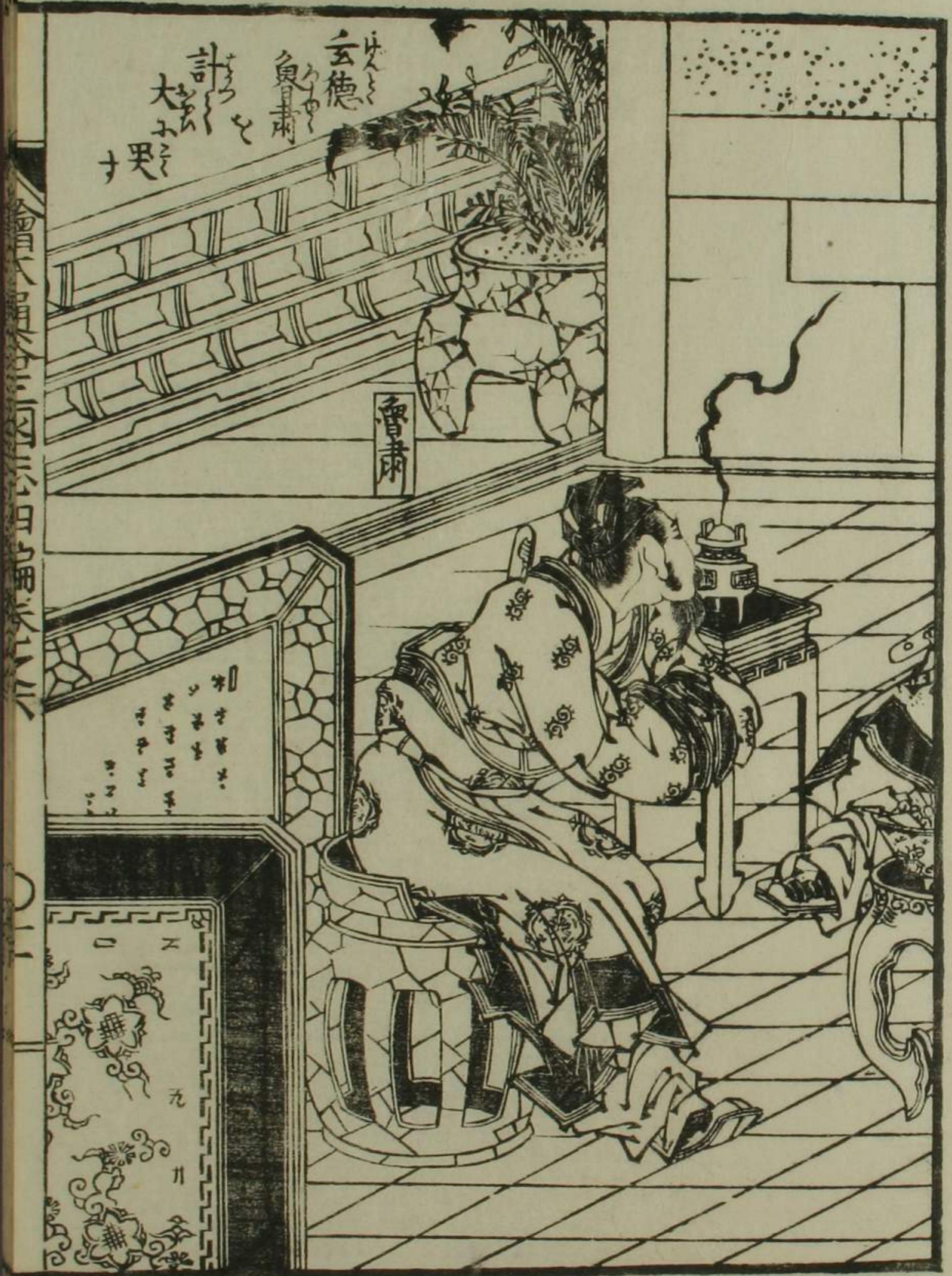
滅るさんと一舉。曹操大喜で曰く。南方を討て  
しゆ人。もと玄徳孫權が力をあらそく拒へて。怕る汝のうあ。  
計うある程昱曰く。吳の孫權が頼むもの。周瑜あり。丞相  
はま天子の勅命ありとて。周瑜を南郡の太守を封ド。程普  
と江夏の太守を封ド。華歆を朝廷としやて。ともに用ひり  
あ。周瑜程普を封せられたる城を取ると。又玄徳と荆歎を  
あらそへ。あらそへ。合戦をよみ。そのとれ虛名のにて別々良計を  
あさべ。忽ち。打滅さん。曹操をあらぞ喜ば。の計も。ぐるを合  
へりとて。即時。華歆を臺上よりびのを。さもく恩賞やめた人  
て。大理寺少卿を封ト。詔を下して。周瑜を。總領。南郡の太  
守。封ト。程普を江夏の太守を封ド。勅命を傳ぐ。吳の国へ

昌へぞ回りノル  
使を差せ酒宴松刻よとよで藝人將と刃具一  
つゝへそえんまとすくひもとせうきひとよしよ

孔明三氣死周瑜

去程ニ勅使詔を傳へ。呉より下り。周瑜を南郡の太守ニ封す。程普や江夏の太守ニ封す。とくに三入喜んで詔を受思と謝り。とく勅使を回り。周瑜もまことに。荆が元もくにまきと玄徳もうらへ重き。いま天子詔を下す。また南郡の太守ニ封す。とくに。一寸の地とも得るとあとは。早く荆を攻め。東回りとく。日比の恨を散せ。ひとそその身の瘡を癆す。叢桑よりあづら書簡をもつて。呉主孫權よまのうと報せ。孫權へ南徐よあひて。その書簡をひらき。いそをこ魯肅とよんで見く。彼をえ

又荆公収を取返さんとひよて。玄徳孔明と出接となり。いま玄徳  
まが妹の婿とありてひよく。荆公収を返すとてあつて汝あまとと  
いふせん。魯肅が曰く。某さきより玄徳孔明と約を固くと誓文  
せどり来まつて蜀の国を取てのち。又荆公収を返さんとひよく  
大よ叱りて曰く。り一蜀を取て後。又返さんといひ。何まの年。  
きう返まべきといひ。月日を送らば。すが一生の中。又荆公収を  
とあたへ。ト魯肅が曰く。某孫がやも再び荆公収を渡すをやく  
まきを東返さんと。卒々船のりて。生よハラタマのとん。玄徳。荆  
公収。又あひて。をひきく。兵糧と財へ。軍馬と調練と。博く賢  
人を求め。ひなま。四方遠近。まきてまく傳ぐ。よきもくとえ  
せ奉る。浩る。あよ。吳の国より。魯肅きなまくと告ル。まくと玄徳



をあらち孔明又問て曰くひまうきが来るへあふやぞ孔明が曰く  
孫權さたよ君や荆歴の太守みまむさま。曹操が隣を伺へ  
んとて怕きてあり。曹操は周瑜を南郡の太守とさせられ又  
荆歴をあらそへせく中きく計をあさん為あり。魯肅がき度  
る。周瑜まで南郡の太守とせらきて又荆歴を奪ひ  
取んとむろの意と起せり。玄德の曰く志うるどきへ。もあ  
とみべき孔明が曰く魯肅も一荆歴のゆそや坐と。君兎  
角の谷であさむ大々声とをあひて哭き。君の哀へで深く  
哭きゆくと某がひき生ぐ計をあさん。玄徳をあら坐む  
。魯肅と堂上に請じて坐て蒙り。ハルマ。魯肅がいざ。  
皇叔ハムが君の婿あま。某が為すも主君あり安んぞ坐え

就べき。玄徳の曰くあふや。又護退し。旧交とあゆめ人。魯  
肅卒。もうかんからず坐。茶礼を以てヤハラ。某のま與族の命  
を受。やのむら荆歴の事と。やまくこちよ來り。なりとぞ久く  
借りて。ひまよ至るまで返さ。今日一家の好ともすば  
りあれ。早くあらよく返し。玄徳まともあへき。面を掩て  
大哭。哭を。魯肅愕ひて問て曰く皇叔。あふどそう哭  
。玄徳声をあひて。ひよく哀ゆ。不。孔明屏風の後  
より出て曰く。もとより。よく。聞り。魯肅。も。君の哭。あひ  
細き。もうかんからず。魯肅が曰く。某のま。孔明が曰く。も。魯  
肅の仔細を述べ。君。とき。荆歴を借す。と。蜀の國  
と。取て後よ返さ。と。せう。志う。と。よく。も。蜀の劉璋へ譲

朝の骨肉。又君と兄弟のぞく。兵と起きて。その國を奪取べ。天下の人。唾て吐く罵るべ。又荆歎を返す。蜀の國。とも取ざへ何との所す。身を居んも。荆歎と返さざへば。吳侯の怒り。のぞく。とやある。今のあるへ事。兩あがら難い。まよき。而左哭きゆゑとひひる。玄徳又胸を打て大え。あらま。あらあゆく哭きゆゑ。魯肅坐て起て曰く。皇叔さの哭きたまひ。そ某孔明とよろしく事と議せ。孔明旨く御辺経ぎ。へ國に向く。吳侯と見へ。言の勞と辞せ。皇叔の痛く哭きたまひ。諸々。あらとが。吳侯定かで怒り。下。魯肅が白くも。吳侯志ながへふと。ひう。孔明旨く。吳侯とよ妹。君と妻せりへり。安んぞ。たゞへた。の理。あらふや。私づく御辺よ。

く。おの事と計ひ。人魯肅もとより寛仁の長者。あら。玄徳の痛く。哭きゆゑ。と。児角の議論。もと。酒宴已で回り。また。玄徳孔明拜辭。と。送り。魯肅の舟で解て。直。柴桑。ゆき。周瑜。あら。右の趣を告り。周瑜。大え。ぞろひて。曰く。御辺又孔明が計。と。出。技を。えりむ。玄徳。劉表。自身をよせ。あり。と。を。常。ふ。圓を。奪つ。と。ち。の意。あら。況や蜀の劉璋。や。あ。と。ぞ。漢室の宗親。ある。と。あ。と。取を。とい。の理。あら。んや。た。あ。と。ぞ。して。事と。託。卒。と。荆歎を。返。さ。と。ち。の。あ。と。も。荆歎。と。返。さ。と。び。御辺。あ。と。す。君の怒。あ。と。か。ん。と。き。一。の。計。あ。と。孔明。と。勝。一。得。下。御辺。再。び。荆歎。と。行。と。魯肅。が。白。く。私。が。か。と。計。と。き。う。と。周瑜。

が曰く。御辺又荆刃又行ぐ。已ニ妹を以て。婿として。嫁じきも。上々まき  
をあらち一家の好あり。蜀の劉璋へ。漢室の同宗あれ。國を  
奪ふ志のひき。蜀と吳の國を起し。蜀の國を攻取て。  
婿引生物又進らまじ。そのちうあらど。荆刃と返さる。トゞ  
ひき。魯肅が曰く。そぞ蜀の國へ天下無双の難所す。とよ遙  
ぶる。人の困と經くむくとあるべ安へぞ容易に攻取る。くる  
ム。ちの計無用。又あらぢや周瑜めざ笑て曰く。御辺まとも鷲  
実の長者あり。よき安へぞ。うづくく攻取と。得んた。蜀と  
取て名とし。実の荆刃と東ノ為あり。そぞ蜀と攻うといひて大  
軍荆刃の道を通へ玄徳。あらぞ生むにて。さてあをと。いふと  
き兵糧武具あらど。請求めた。ちよ城下をよせ。その備あき

ひえ。孔明きくよ點頭。曰く古より非親不解其禍と  
り。またよとて一家の好ともとあつて玄徳謝して宣  
ひ。此まあふる魯肅の御恩あり。祠をやめて安人を謝す  
ヒテ得く。孔明が曰く。吳の國の軍勢蜀より多くあるも  
ぢの地を通らん。よきがから遠く生ぐれどあきべ。魯肅  
の内ひうみ喜ひわざと業桑を回り。玄徳をあへち  
孔明又問て曰く。は蜀で取る。よあたし人といふ。如何  
る。人ぞ孔明大笑。曰く。周瑜が死際近付とり。あき示  
の計。やあて安んじよく。小兒をあざむき。得人。玄徳の昌  
く。その故とき。孔明が曰く。古の假途滅虢の計  
策あり。周瑜は蜀を攻ると名へ。実を荆を取る人

為あり。君も一城を出で。吳の軍勢かとゆゑあつて。勢ひ  
よの内で。生取らで。より備を攻く。不意。荊をと車  
んとて。玄徳の曰く。志うるどきへ如何せん。孔明が曰く。御心  
を安んじよ。よきをあきだ。收拾窓弓。以擒猛虎。安排  
香餌。以釣鰐魚。周瑜も。あくま來ら。など。死を  
よ。九分の魂を失つて。趙雲を呼んで。ひそかに計を  
さげ。ひそかに備をあつて。相待候。玄徳深く喜び  
ま。魯肅の舟を飛せて。柴桑より回り。周瑜も見く。玄徳  
孔明大喜び。吳の國の軍勢。荊をと通ば。あくまで引  
らせて。さてあきへとやひと詰り。周瑜手を打て  
ゆ笑ひ。あひ度をとめて。孔明をあきむき得とり。御邊より南

周瑜  
魯肅  
密計と  
授く



徐々行。おの由を吳侯と報ト。諸方の城々用ひの勢にて。又程普と大將とし。大軍とそあ。とて助く。後陣と瘡大半平愈。と已。白旗を掲げ。膳水も止りて。一身無事あり。甘寧と先手。川を徐盛。丁奉と引て中軍と備へ凌統。呂蒙と後陣と。水陸の勢五万余騎。二手と。荆又進發。周瑜二万五千の兵と引て舟手よりむかひの内仕合へたりと喜び笑ひなり。んで已。又口まで来り。あの辺へむかひ出たる人やあると尋ねさせり。忽ち劉皇叔より。糜竺といふをの使たり。と報を周瑜。おび入と對面。けり。糜竺が曰く。主人を

よ金銀兵糧を用意。と。諸軍勢の勞を慰せ。と。統てさの不運。引きたり。周瑜が曰く。皇叔への。何と居り。と。糜竺が曰く。さぞぞ。荊の城と。足下の來り。と。待て。酒と。さもやんと。周瑜が曰く。よ。國の大軍と。起を。皇叔の為。蜀と取て。進うせん。と。諸軍と。遠路。渡る。あらま。せらへ持成く。さるぐ。志す。と。糜竺。と。れて回り。周瑜。陸上と。兵船と。江上と。そあ。と。諸軍次第と。守りて。と。と。公安まで。來り。その辺と。伺。セル。と。進人の舟。もと。入。坐して。むかひる。人も。あらま。志。と。進んで。早。荆の城まで。十里あまり。あらま。と。遙。向を見渡す。静。と。と。ひとり。もと。と。先手。進へだる。斥候の

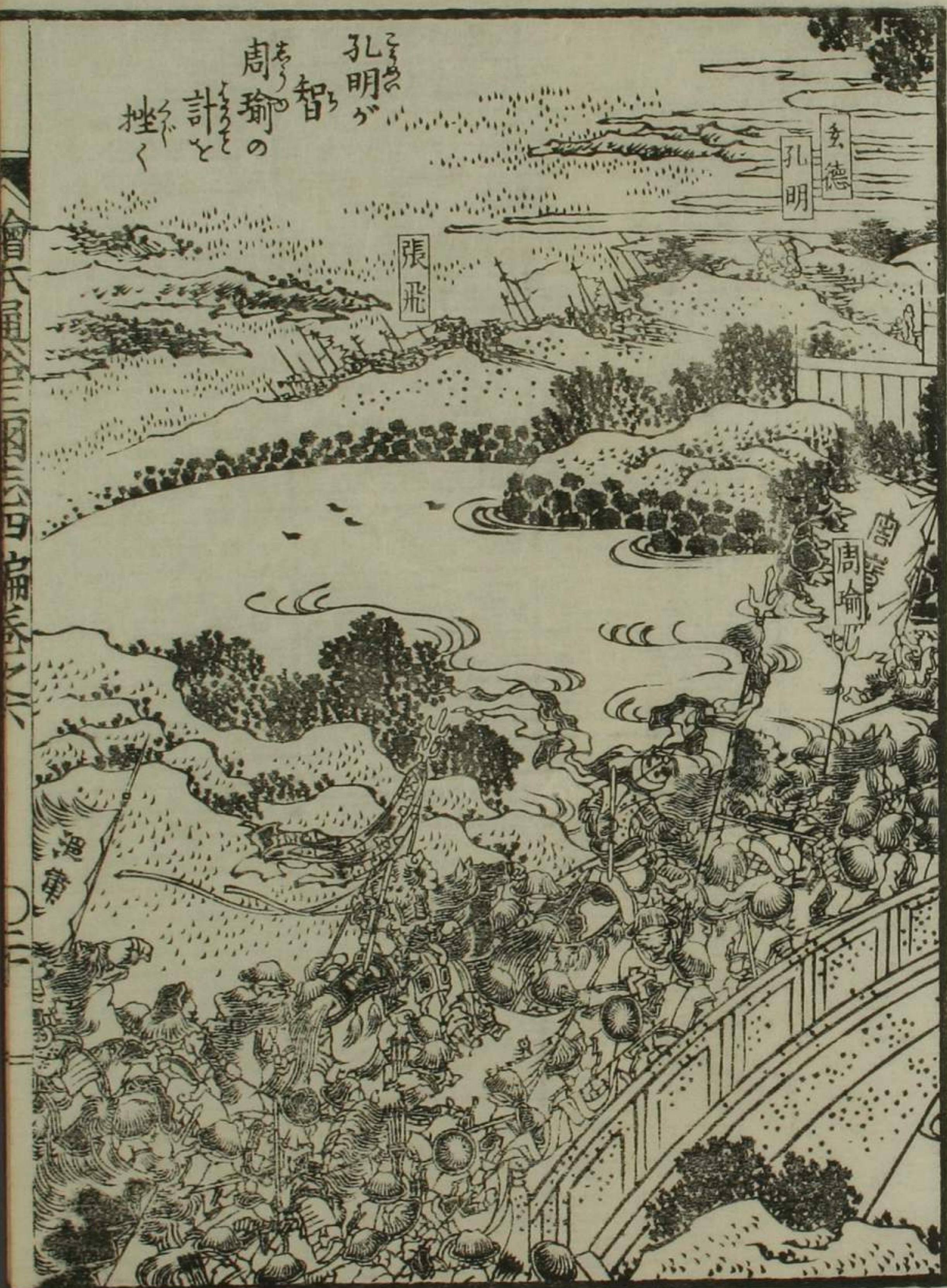
兵もせ回り。荊刀の城とくりえを白旗二旒あはせ。人ありよ  
こへぞひとやまと周瑜ももや。岸の邊より舟を止せ。甘寧徐  
盛丁奉ホヤホながへ精兵千余騎。そなぐち。荊刀の城下よ  
到り。土合人はあうりて。周瑜馬を勤め。兵を命ど。  
門をしらけとよびらせ。内より問て曰く。さくふ来るをよ  
きのそ。吳の兵をとて。曰く。あまへ。吳の國の大都督周瑜す。  
その言ひよど果だる。一吉の梆子をあらそく。城の上ある白  
旗を推倒。紅の旗と二流とあげ。鎗をそろへ。戈をあら  
べ。大將趙雲高矢倉ゆめらへ。大音とて問て曰く。周都  
督いあるや人ありて。來りえ。周瑜答て曰く。皇叔  
の為。蜀を取て進せ。と約せ。さのゆえよ。來き。御

辺あやへで問ひあよ。趙雲旨く。孔明軍師。とぞ。御辺  
の假途滅虢の計と推量。と。よきと。あの城。住。置。見  
り。よ。君。の。漢室の宗親。安。と。義。背。蜀の國。と。東  
ん御辺。も。端的。蜀の國。と。東。と。身。と。藏。天。下。信。と。失。よ。ド。周瑜。あ。き。と。き。計。の。あ。ら。軍。と  
と。ぞ。と。急。よ。馬。と。引。回。さ。と。と。と。二人。令。の。字。の。旗。と。き  
か。う。よ。と。せ。來。り。い。巡。教。誓。の。勢。と。く。伺。か。む。と。關羽。江  
陵。よ。攻。來。り。張。飛。の。秒。飯。よ。攻。來。り。黃。忠。ハ。公。安。よ。攻  
來。り。魏。延。ハ。長。陵。の。小。路。よ。攻。來。り。四。方。の。軍。馬。よ。の  
多。少。よ。う。と。喊。の。声。遠。近。よ。ひ。と。四方。百。余。里。と。震。動  
1. 三。五。周。瑜。と。取。生。よ。と。よ。う。と。告。け。と。周。瑜。よ。と。

きいて馬上たざりと大おほきけべ。金瘡きんじゆうあらぐくやぶきとく。馬より  
倒さかみ落おち血ちを吐ぬて絶ぜつ入いりふ。諸將しょじょうまろる救すくく船中ふなぢゆう回まわり。  
主ぬしの心こころ地じ付つくる。忽こもち一人ひとり走はり来くり。玄げん徳とく孔こう明めい  
前まへある山さんの頂ね。心こころ地じ付つくる。忽こもち一人ひとり走はり来くり。玄げん徳とく孔こう明めい  
よく怒いかりて。牙いばを咬く齒くしを切り。そのまゝとて輕うるく下くだそ蜀しょくの  
國くにと取とりあたへよ。とをや。とらふ。あらす誓ちかうを取とべ。と  
て拳こぶしを握つかてうちもひふ。吳ご主しゆ孫そん權けん弟だい孫そん瑜ゆと大おほ將じょう  
て助すけの勢せいとさへむけたり。周しゅう瑜ゆよび金かなて對面たいめん。右うのみも  
よ語ごり。孫そん瑜ゆ曰いへ。兄おの命めいを受うけ。ちと來くて御ご  
辺への力ちからを助すけ。ひどき。おのまへ叶かな。よト。あづらへ引退ひきとりきた  
まと。先手さきの勢せいと下くだ知し。さとでよ巴丘おきまで來くり。りくよ。

尔そ候まの兵ひ向むか。大勢おほのこのへ敵寇の勢せいあらむとよ。る。  
孫そん瑜ゆよく。あまきけべ。荆けい州しゆの大おほ將じょう關平かんへい劉封りゅうほう二人江  
上うで切塞きりせたり。と。周しゅう瑜ゆ。怒いかり。牙いばを咬く。そ  
らも。も。孔こう明めい使しと。と。書しよ簡かんを送おくり。と。周しゅう瑜ゆ封ほう  
といひたて。さと。と。の書しよ。白しらく。

漢軍かんぐん師し中郎ちゆうろう將じょう諸葛しょかつ亮りょう致しつ書しょ於お大都督だつとくし公瑾こうひん先生麾ひ  
下さ亮りょう自じ業ぎょう柔じゅう一いつ別べつ至いた今いま恋こゝ不忘めう聞き足あし下さ欲のぞ舉たか師し遠とお征せい轉てん運うん萬里まんり欲のぞ收しゆ全ぜん  
川かわ亮りょう以い爲あ必ひ不ふ可こ也。益え乃の民みん強きょう地じ險けん劉りゅう璋じょう增ぞう弱わ  
足あし以い自じ守しゆ。今いま欲のぞ舉たか師し遠とお征せい轉てん運うん萬里まんり欲のぞ收しゆ全ぜん  
功こう雖まことに與あ起おき不ふ能のう定じ其その規ひ孫そん武ぶ不ふ能のう善ぜん其その後ご也。操そう雖まことに  
有あ無む君きん之の心こころ而あ有あ奉ほう主しゆ之の名なま或も有あ愚ぐ人じん見み孫そん失しつ利り於お



赤壁無復與遠伐之志矣。今操三分天下。有其  
二一欲下飲馬於滄海。觀兵於吳會。上安肯坐守中  
原而老王師。今孫將軍與兵遠征。非長計也。  
倘操兵一至江南。為虜粉矣。不勿心坐視。特此告  
知。幸垂照鑒。

周瑜見了。恨氣胸々塞り。長嘆一声。左右の人々呼で  
紙筆を求め。手自遺書を封じて。吳主孫權より上らす。其の  
大将として曰く。忠を尽して。國々報むるをあらがひ。  
みあらざ。いきせん天命をとどく。死たり。諸將も力を尽して。君  
事とも。業をあこへ。といひ。昏絶して。目を閉る。た  
ちまち又く。息をつぎ。天を仰て。長嘆。天まで。周瑜  
け起て。遺書をひらき。とまどとあて。魯肅を大都督として。  
周瑜が職を代へ。その書を曰く。

周瑜伏褚泣血頓首百拜致書於主君明公麾下一切以  
允才。昔受討逆殊特之遇。未安以腹心。遂荷榮任。  
統御兵馬。志執鞭弭。自效戎行。先定巴蜀。次  
取襄陽。憑頼威靈。事在掌握。至以不逞。忽有暴疾。

暇自靈療日加無益。人生有死修短命矣。誠不足  
惜。但恨微志未展不復奉教命耳。方今曹操在北  
疆場未靜。劉備寄寓有似養虎。天下之事尚未  
知終始。此朝士旰食之秋。至尊垂慮之日也。魯肅  
忠烈臨事不苟可。以代瑜之任。人之將死其言也  
善。倘或言有可採。瑜死不朽矣。臨楮不勝痛切之  
至建安十五年冬十二月朔日上書。

孫權見瑜大哭。瑜王佐之才。又有不幸。瑜之子  
亡。而瑜又如何。終歸魯肅。而瑜之子。又不知所  
之。從弟瑜。當時魯肅。大都督。國中的兵馬。總  
領。而瑜。極。巴丘。送。孫權。而

瑜平途。生。死。哭。淚。笑。哭。

孔明大哭周瑜

あのとき孔明へいまと周瑜が舌立そく死ふととあらざりふる  
夜天文とこゝよ将星をとどめ地竜落りすとあらぢ大々笑ひ周  
瑜は死せりとこほきの日玄徳は見くそのひと語る。玄徳人  
と牛とまきとらましバ周瑜果と死ふりとやまと玄徳の  
曰くいよ周瑜死せり却くいと計をあきく孔明が曰く周瑜  
う職み代く。吳の大都督である。そのうちを曾肅みて  
人。其夜天文とこゝよ将星となく東方とある。某いよ  
周瑜が垂て吊と号とく吳の國よと賢人とたむねて  
ゆるひ來り君の助とす。玄徳の曰く先生も。吳に行

ゆゑの圍の大將もまことに。孔明が自く周瑜  
があつてきや。其とまづ。柏木を。況やいきよどり柏  
木とく趙雲ともあひ五百余騎と引て祭の具と  
舟の内て生火を。途とくまへ。吳主孫權と。魯  
肅と大都督と。周瑜が柩と送る。柴桑まで回りぬ  
と。やまとさへ。直と柴桑よりとりかまへ。番の兵ひを  
ぎ魯肅又報。劉皇叔は孔明と使。と。周都督の  
喪と吊とひしる。バ魯肅むへびと對面を。周瑜が手下の  
大将もまづ。あゝ孔明と対面。日比の恨を。かく  
おけど。趙雲が劍と帶て立たる。あへんうるく  
手と下さと孔明靈前より奉り。親りまく酒とあて地

さかやく  
よんじん。  
今まに奈文と競で呑く。

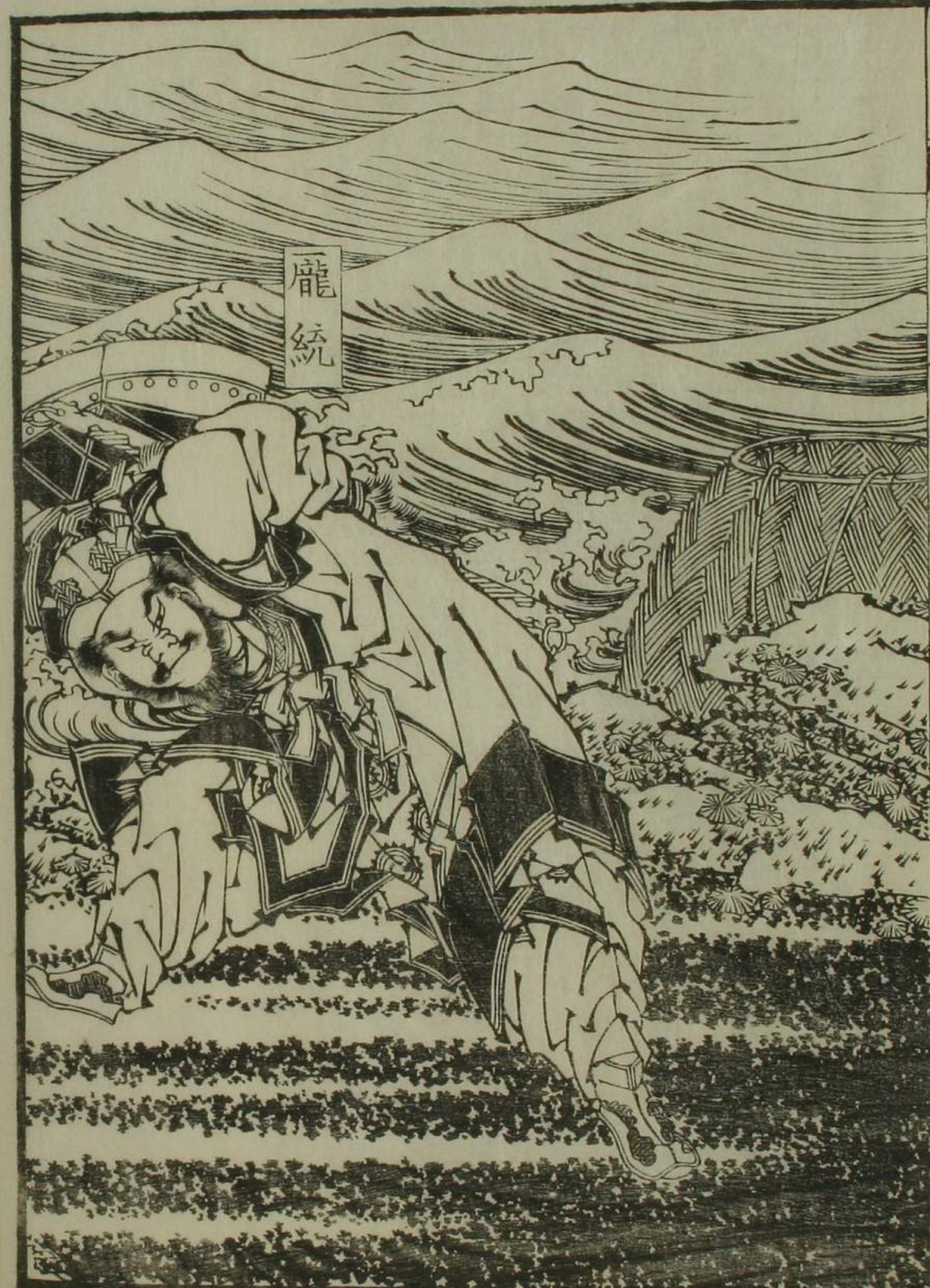
雜大漢建安十五年南陽諸葛亮辭以清酌庶羞之儀致祭於大都督公瑾周府君靈前曰嗚呼公瑾不幸子亡修短故天人非不傷我君寔爰醉酒一觴君其有靈享我崇嘗。昂君幼學以文伯竹付。仗義疎財讓舍以居。昂君弱冠濟會風雲定建霸業。割據江南。昂君壯力雄鎮巴丘。景升懷慮討虜無憂。昂君千度佳配小喬。漾相之誕。不愧當朝。昂君氣既主。不納質。始不垂翅。終能奮翼。昂君都陽。將幹來貌。府君納古事主教濟。昂君弘才文武壽畧。通之小子。心寒膽落。昭君

凛々。公獨擧々火攻破敵。挽強為弱。相心。君當年雄資英矣。哭君早逝。俯地流血。忠義之心。英靈之氣。余終三紀名垂百世。哀君情切。愁傷半結。惟我肝膽悲心無斬絕。昊天昏蕩三軍。捨然主已哀立。更皆淚漣亮也。不才同計。求謀助與。拒曹輔漢。安如釤犄角之援。首尾相儔。若存若亡。何慮何憂。嗚呼公瑾生死永別。朴守其真冥冥滅滅。魂如有靈以鑑我心。從此天下再無知音。嗚呼痛哉。伏惟尚饗。

孔明祭。了了大哭。至地。伏。淚泉。哀慟。已

已。吳の國の將士も。とて哀て。催。人を周瑜と孔

明とたゞひよ睡。づらうぢとひ。びいよ。おの祭の体とて。哭。と親ひと骨肉のじと私語。魯肅。孔明。痛く哭くとて。ぐの内。哀きゆよ。一孔明。き。周瑜。害する。すり。周瑜。氣量窄。周瑜。害する。すり。周瑜。敵ひ。孔明。うれて岸の邊。生。と。舟。の。ら。人。と。ある。も。一人。道服。着て竹の冠。と。ぎたる。の。臂。と。べく。孔明。引。相声。も。げ。よ。て。曰く。汝。と。周郎。と。氣。と病。せ。く。せ。ぞ。却。表。を。吊。と。号。と。さ。と。より。來。り。吳の國の人。と。あ。ら。う。と。欺。ひ。と。土。と。作。ま。る。人。形。と。ど。く。と。争。と。よ。と。あ。ざ。む。く。べき。と。劍。と。抜。て。殺。さん。と。魯肅。あ。と。と。て。後。よ。り。を。來。り。無。礼。と。あ。と。よ。だ。り。な。と。ぞ。と。え。と。さ。と。あ。ら。う。裏。陽。



の麿統字ハ士元道号ハ鳳雛先生も魯肅をよぶ。孔  
明はま礼をやめてあくま來とす。魯肅を害するをあくま  
ハ主に麿統劍を棄て打筈ひまと戯をもとめ。ま  
でのひる。魯肅もれて回りけり。麿統ひとり孔明を送りて。  
船中も來りとも心中のみと物語る。孔明曰く。まき  
量み吳主孫權。うらうを御邊を用ひ。トモトモあらぐ  
く合さるとあらば荆歎も來と。もと玄徳を佐。タ人玄徳  
は寛仁の君なり。御邊きたる。まうちを日比の志を遂ん。  
生書簡を封ド。トモウ置べ。御邊あまとから。荆歎も  
行。また居合をと。玄徳もとを用ひ。トモウ。あ  
別。それより孔明ハ四郡の巡見も出たり。吳主孫權ハ蕪湖で

いふまで坐。周瑜が柩をむへ。引き祭をす。あくま  
き周瑜が子。三人人あり。一人は女あり。嫡子周循。二男周胤。  
ゆく周瑜が柩を送る。故郷もあらへ。葬り。孫權も南  
徐も回り諸將と周瑜が才を称じ。日夜涙を流す。いま已  
ぬ。が股肱を失へり。安ノぞ又大業を舉さん。哭きけ玉。ハ  
魯肅が曰く。某ハ碌々と。道をたどる。庸才ある。周瑜  
がさくや。大都督の任を受てやせども。まるで。かく  
その職。まうあ。を往く。一人をまちやて。君をなしけり。ハ  
あの人。上天文を通じ。下地理を曉り。隸畧の管仲。樂毅。  
辛方を。樞機の孫子。呂子もあらへ。周瑜もてその言を  
ち。孔明も深くその智を服。幸いまさのあらわ。君あく

ぞ。さりとて用ひゆる孫權大喜んで曰く。孫統もその名  
ときうる魯肅が曰く。ある人の襄陽の世家。龍統字へ士元。  
道呈て鳳雛先生とやせとある。孫權が曰く。よきひを  
その名をきけり。何より。早速よべ来ま。魯肅をあへ  
ち。龍統とある來りて内に入。礼をあそ。孫權その人  
とこう。向黒く鼻塾げ眉厚く。鬚短く。形容古怪。常  
男様の一くりけ。彼の内喜び。とある。脚辺の學。  
いふ。藝あると問ひ。龍統答て。自く。もろとも物。拘。機  
よ臨んで。变。應。孫權又問て。曰く。御辺の才智。周瑜。比  
其。然。龍統曰く。某。學。不。周瑜。と。大。相違。孫權  
常。周瑜を愛。及。そのわらど。と。やひ。と。龍統。よま

軽。ドク。の内。怒。と。含。て。御。辺。所。退。け。重。て。用。る。時  
節。ゆえ。と。ひ。入。て。龍。統。長。嘆。と。外。す。止。る。魯。肅。問  
て。曰く。君。あ。い。ぞ。用。ひ。ゆ。さ。る。孫。權。が。曰く。され。狂。人。あ。う。用。ひ  
何。の。益。あ。ら。ん。魯。肅。が。曰く。曹。操。と。赤。壁。と。破。り。と。ある。人の  
連環の計。と。あ。り。て。第。一。の。功。を。立。と。り。君。よ。く。あ。と。て。あ。い。す。  
孫。權。が。曰。く。あ。あ。ん。ぞ。龍。統。が。功。あ。る。ん。曹。操。が。手。下。の。兵。  
大。波。え。陶。と。と。憂。ひ。て。本。よ。り。舟。と。は。あ。き。合。せ。ん。と。ある。  
意。あ。り。よ。れ。り。と。決。と。あ。の。人。と。用。ま。で。魯。肅。と。あ。く。勧  
き。と。孫。權。用。る。氣。色。る。も。と。力。あ。く。外。と。止。龍。統。と。よ。で。  
ヨモ。御。辺。と。さ。く。む。と。い。ど。い。さ。く。吳。侯。人。と。用。る。と。あ。い。を。  
さ。く。忍。で。時。郎。と。侍。丈。と。り。ひ。と。と。龍。統。と。長。嘆。と。首。

これより。ろしく。おへん。くふ。  
と低て言ひ。魯肅が曰く。御辺の國を去り思ひや  
龐統答へ。魯肅又曰く。御辺匡清の才を懷く。何ぞ功名の  
歎き。夏侯文曰く。止り思ひ恐く。徒々埋まつて。意をもつ  
り。あらば明ヌ君。龐統が曰く。是と都行て。曹操の事をもつ  
て。魯肅曰く。曹操の事より。明珠を暗に投が如く。速ヌ荆けい及ゆき行く。  
劉玄徳の事。えもあつて重く用もち。龐統笑て曰く。よと本うきの意も  
り。曹操の事より。戯わざふ詠かたあり。魯肅曰く。書簡しょじんを。御辺  
と玄徳よ勧め。御辺。荆及けいそくの事も常つねよく。國と好く。續つづく  
び。睡ねくと。曹操と滅めをと。また。两家の幸さい。相構あつらへく。ども。そ  
ち。富士のよ。龐統曰く。また。平生の願ねがひ。とて。とも。書簡しょじんを  
求めて。直ただ。荆けい及ゆき。赴むかる。

續本通俗三国志四編卷之六終

